太宰府の文華

～公文書館だより㉙～

有智山僧の禅宗迫害

鎌倉時代の大宰府では天台系の寺院が勢力を誇っていました。中でも宝満山に所在した有智山（内山寺・大山寺）は西国における天台系の拠点寺院として君臨していました。一方、臨済禅の寺院が博多（聖福寺・承天寺など）、大宰府（崇福寺など）に建立されたのもこの時期で、両者は鋭く対立しました。

天福元（1233）年、有智山僧の義学は博多円覚寺に滞在する円爾に危害を加えようとします。円爾は聖一国師ともよばれ、のちに博多承天寺や京都東福寺の開山となった禅僧でそのころ入宋のため博多に滞在していました。義学が「禅宗を厭悪（激しく嫌うこと）」したことがこの事件の原因でした。このとき、円爾を救ったのが謝国明という南宋臨安府出身の宋人（中国人）です。当時、博多に住みつき宋人街を形成した宋商人たちは「博多綱首」と呼ばれ、国内の有力寺社や貴族と結びついて、博多を拠点に広く東アジア海域で貿易活動を行っていました。謝国明はその代表的な人物といえます。博多の櫛田神社近くに居住していた謝国明は、円爾を私宅に住まわせ日夜警護しました。

その後入宋を果たした円爾は、仁治2（1241）年に帰朝して大宰府に崇福寺を開きます。続いて、仁治3年には博多に承天寺を開きますが、このとき檀越として経済的に支えたのが謝国明でした。

すると今度は、寛元元（1243）年、有智山の衆徒らが博多承天寺の破却を朝廷に要求するという事件がおきます。このときも円爾を中心とした禅宗の興隆に危機感をもったことが原因だったようです。しかし、朝廷がこの要求を却下し、逆に承天寺・崇福寺の2寺を官寺とするよう命令を出しました。おそらく崇福寺も有智山の破却要求の対象となっていたのでしょう。

ここで注目されるのが、当時博多にあった禅寺の聖福寺が破却の対象として見えないことです。円爾―承天寺・崇福寺―謝国明という禅僧―禅寺―博多綱首の関係は日宋貿易の権益につながるものであり、旧来の宗教勢力である天台系寺院にとって見過ごすことのできないことでした。しかし、もはや禅宗の興隆を止めることは難しく、幕府・朝廷に保護された禅宗はこのあと急速に広まることになります。

太宰府市公文書館　朱雀　信城